

三宝を信信ひ、己が家に幢を立てて寺と成し仏を安き法を修ひ生を放つ。此れより已後、号けて那天堂と曰ふ。終に病むこと無く、春秋九十歳に死ぬ。鼻奈耶經に説きたまふが如し「迦留陀夷昔天祀主と作りて一の羊を殺ししに由りて、今に羅漢と作るといへども後に怨の報を得て婆羅門の妻に殺さる」と。最勝王經に説きたまふが如し「流水長者、十千の魚を放ち、魚天上に生れ、四十千の珠を以ちて、現に流水に報ゆ」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

至誠心をもちて法華經を写し奉りて験有りて異しき事を示す縁 第六

聖武天皇の御代に、山背国相楽郡に、願を發せる人有り。姓名詳ならず。四恩を報いむが爲に法華經を写し奉り、大乘を納れむが爲に使を四方に遣りて白檀紫檀を求めしめ、すなはち諸樂京に得、錢百貫を以ちて買ひ、工巧人を喚び、規りて函を造らしめて經を納れ奉る。經は長く函は短し。經を納るること得ず。檀越大に悔い、また訪ふに由無し。故に誓願を發し、經に依りて法を作け衆の僧を屈請へて、三七日を限りて悔過し哭きて曰さく「また木を得しめ

よ」とまうす。二七日を歷て、經を請ひて試に納る。函目づから少延び、垂しめて納ること得ず。檀越ますます精進し悔過す。三七日を歷て、納るにすなはち納ること得。是に奇異び疑ひ思はく「もし經の短むか、もし函の延ぶるか」とおもひ、すなはち本の經を請ひて新しき經と均べ量るに、なほ倅しくして失はず。誠に知る、大乘不思議の力を示して、願主の至りて深信心を試たることを。更に疑ふべからず。

智しき者變化の聖人を誹妬みて現に閻羅の關に至り地獄の苦を受くる縁 第七

稱智光は、河内国の人、其の安宿郡の鋤田寺の沙門なり。俗姓は鋤田連、後に姓を上村主と改むるなり母の氏は飛鳥部造なり。天年聰明し。智惠第一にして、王蓋蘭瓮大般若心般若の等き經の疏を製り、諸の学生の爲に仏の教を続伝ふ。時に沙弥行基といふひとと有す。俗姓は越史なり。越後国頸城郡の人なり。母は和泉国大鳥郡の人、蜂田樂師の子なり。俗を捨て欲を離れ、法を弘め迷を化へたまふ。器宇聰敏く、自然づから生れながら知りたまふ。内に苦

ておこなわれる。二 歌歌したのであらう。二 長跪は仏典語。二 漢神を祭つてかえつて吉難に遭つたので、神を悔懺する心がおきたのである。二 劫は、悔犯 悔辱、の意(敦煌文獻語言詞典)。二 種^二の語が三三と対立するものとして用いられている。

一 未詳。無四村の「無」と関係があらう。

二 鼻奈耶・九の取意。衆經要集金藏論殺書縁、諸經要集十惡部殺生縁にも引用。

三 金光明最勝王經・長者子流水品の取意。

第六縁 三宝縁・法十に引用。三宝縁より本朝法華縁記下・一〇五に書承。今昔物語集、十二ノ二十六に書承。

四 至誠心(觀無量壽經)。五 京都府用樂郡、綴喜(二)郡の一部。六 上卷三十五縁。七 法華經の異名として用いられている。八 和名抄は、紫檀を色によつて分け、赤いものを牛頭紫檀、黒いものを紫檀、白いものを白檀、としている。ビヤクタンはビヤクタン科、シタンはマメ科。九 錢一貫は一十文。たとへば、この当時の布二端(四丈三尺、幅二尺四寸)の価格に二百文(石田茂作)。二〇 となへば、伝聖武天皇宸筆賢愚經(大聖武)は料紙が縫二七、八、紙金字金光明最勝王經(國分寺經)は料紙が縫二六、四、これが裁減されて軸が付けられるとさらに長くなる。二一 細字の一巻本の法華縁が下巻一縁にみえるが、本説話の法華縁は特に何も記されていないことより推せば、七巻本あるいは八巻本の妙法蓮華縁であろう。下巻六縁は八巻本、中巻三縁は七巻本、と推測される。函の長さのみが問題とされるのは、おそらく一函に一巻を納めたことによる。下巻六

縁の小櫃には八巻が一括して納められている。法華縁を函に納めるイメージは、下巻六縁の法華縁を小櫃に納めるイメージに結びついている。二 施主。函を造らせた人。三 用談したのが解決の方法が無い。三宝縁・法十は「またこと木をもとむるに、とぶらひえず」とし、(函)を新しく白檀紫檀を求めめる意に解している。四 法華經に附録し、法事をおこなふ。五 もう少しで納めることができるのだが、納めることができない。六 元原文博題。七 堀(マスマス)・加(マスマス)・古訓点にみえる。八 はびみつとめること。六 破羅蜜のひとつ。九 縁が縮んだのか、函が延びたのか。

第七縁 三宝縁・法二、扶桑略記・天平十七年(盛)二月二十一日条に引用。日本往生極樂記・二に書承。日本往生極樂記により本朝法華縁記・上二二・今昔物語集東十二ノ二に書承。二 九「變化」は仏菩薩が姿をかえて現れること。三 如是種種變化現身(妙法蓮華經・妙喜菩薩品)。四 行基大德有、文殊師利菩薩反化也(上巻五縁)。五 元風寺の僧。彼の善觀智心經述義、序に然自志字至于天平勝至四年、合三十四年とあり、天平勝至四年(盛)に四十五歳であつたことがわかる。行基より約四十歳年少。二 大徳府相原市、羽民野市あたり。三 所在未詳。三 次田連とも表記する。四 本書で「姓」の語がきこえずものは「姓(二)」「氏(二)」「氏」と姓の三種がある。「氏」の語は氏と姓をさし示すはあひがある。氏が鋤田・姓が連・氏が上・姓が村主、氏が飛鳥部・姓が造。三 舍利弗(舍利子)に關していわれることが多い。「離言利子、智惠第一、一聞千解(般若心經述義)」。天玉齋益経述義、一卷(東伝燈目録)。散件。

死之後、十九日置之莫燒、妻子置之、猶待期日、唯歷九日、還蘇而語、有七人非人、牛頭人身、我髮繫縛、捉之衛往、見之前路、有樓閣宮、問是何宮、非人惡眼眦、而逼之言、急往、入于宮門、而白召之、吾自知之閻羅王也、王問言、斯是殺汝之讎、答曰當是、則膾机与少刀持出白、急割許、加殺我賊、膾而噉之、時千万余人、勃然出来、解縛繩、曰、非此人咎、所崇鬼神、為祀殺害、爰余居中、而七非人、与千万余人、每日訴靜、如水火、閻羅王判斷之、不定是非、々人猶強白言、明知、是人作主、截我四足、祀廟乞祈、賊膾食者、今如切穴、猶欲屠啗、千万余人、亦白王曰、我等委曲、知非此人咎、識鬼神咎、王自思惟、理就多證、經八日已、其夕告詔、參向明日、奉詔而罷、九日集会、閻羅王、即告之言、大分理判、由多数證、故就多数、判許已訖、七生聞之、管舌飲唾、切膾為効、噉安為効、慷慨捧刀、而建各言、不報怨哉、我誓不忘、猶後報之、千万余人、衛繞於我、左右前後、自王宮出、乘輦而荷、擎幡而導、讚嘆以送、長跪禮拜、彼衆人皆、作一色答、爰吾問曰、仁者誰人、答、我等是汝買放生、不忘彼恩、故今報耳、自閻羅闕還甦、增發誓願、從此已後、効不祀神、歸信三宝、已家立幢、成寺安仏、修法放生、從此已後、号曰那天堂矣、終無病、春秋九十余歲而死也、如鼻奈耶經說、迦留陀夷、昔作天祀主、由殺一羊、今雖作羅漢、而後得怨報、於婆羅門之妻所殺云々、如最勝王經說、流水長者、放十千魚、々生天上、以卅千珠、現報流水者、其斯謂之矣、

4 閻(國)一門

5 白(國)一自

6 折(來)一利

7 膾(來)一膾

8 共(來)一ナマス一呪

9 人(來)一ナシ

10 宋一完

11 刀一力

12 曾(來)一当

13 猶(來)一独

14 雙(來)一拳

15 答(來)一若

16 奈耶(來)一李那

17 卅(來)一卅

18 者(來)一最者

至誠心奉寫法華經有驗示異事緣第六

聖武天皇御代、山背國相樂郡、有發願人、姓名未詳也、為報四恩、奉寫法華經、為納大乘、遣使四方、求白檀紫檀、乃得諾樂京、以錢百貫而買、喚工巧人、規令造函、以奉納經、々長函短、納經不得、檀越大悔、又訪無由、故發誓願、依經作法、屈請衆僧、限三七日、悔過哭曰、亦令得木、歷三七日、請經試納、函自少延、垂不得納、檀越增加、精進悔過、歷三七日、納乃得納、於是奇異疑思、若經短矣、若延函矣、即請本經、与新經以均量之、猶倖不失、誠知、示於大乘不思議力、試于願主至深信心、更不可疑也、

1 詳(來)一桂

2 檀(來)一檀

3 木(來)一木

4 延函(來)延函一函若延函

智者辨妬妄化聖人而現至閻羅闕受地獄苦緣第七

釈智光者、河内國人、其安宿郡鋤田寺之沙門也、俗姓鋤田連、後改姓上村主也、母氏飛鳥部遺也、天年聰明、智慧第一、製孟蘭盆大般若心般若等經疏、為諸學生、統弘佛教、時有沙弥行基、俗姓越史也、越後國頸城郡人也、母和泉國大鳥郡人、蜂田葉師子也、捨俗離欲、弘法化迷、器宇聰敏、自然生知、內密菩薩儀、外現聲聞形、聖武天皇、感於威德、故重信之、時人欽貴、美称菩薩、以天平十六年甲申冬十一月、任大僧正、於是智光法師、發嫉妬心、而誹之曰、吾是智人、行基是沙弥、何故天皇、不樹吾智、唯譽沙弥、

1 連(來)一連

2 聰(來)一聰

3 統(來)一統

4 子(來)一ナシ

5 妬(來)一妬之

6 誹(來)一非